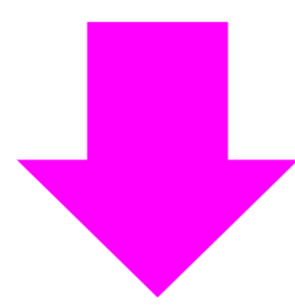


温暖化に対応した紋枯病の発病予測システムと防除体系

農研機構 九州沖縄農業研究センター、
宮城県古川農業試験場



高温多湿を好むイネ紋枯(もんがれ)病は、近年の温暖化により被害が増加してきました。そこで広範囲に紋枯病の発病を予測するシステムを開発するとともに、温暖化条件下での防除タイミングを検討しました。

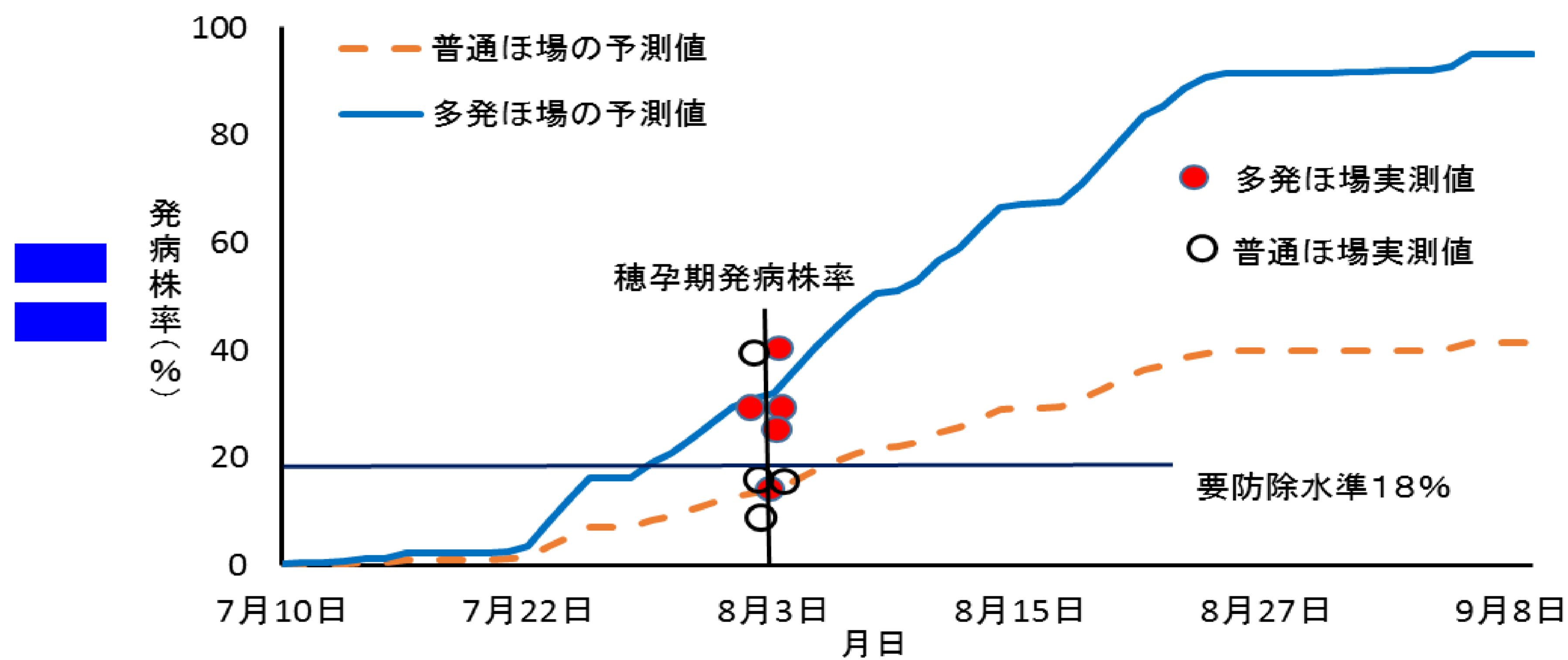


1 前年の発病株率と気象データから発病を予測するシステムBLIGHTASを使って、広範囲に発病を予測できるようになりました。



前年の収穫期前発病株率

任意地点の1kmメッシュ
気象情報



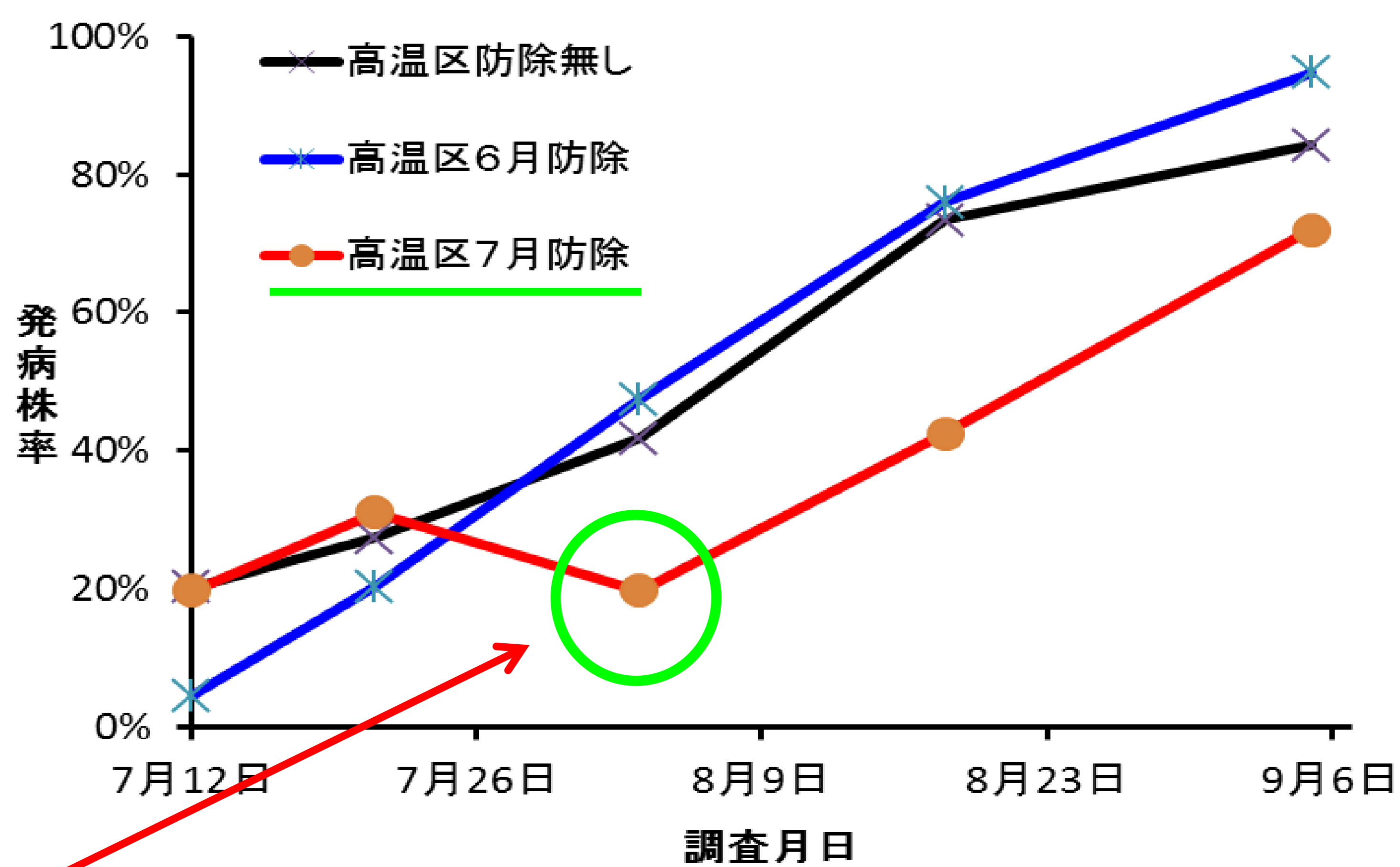
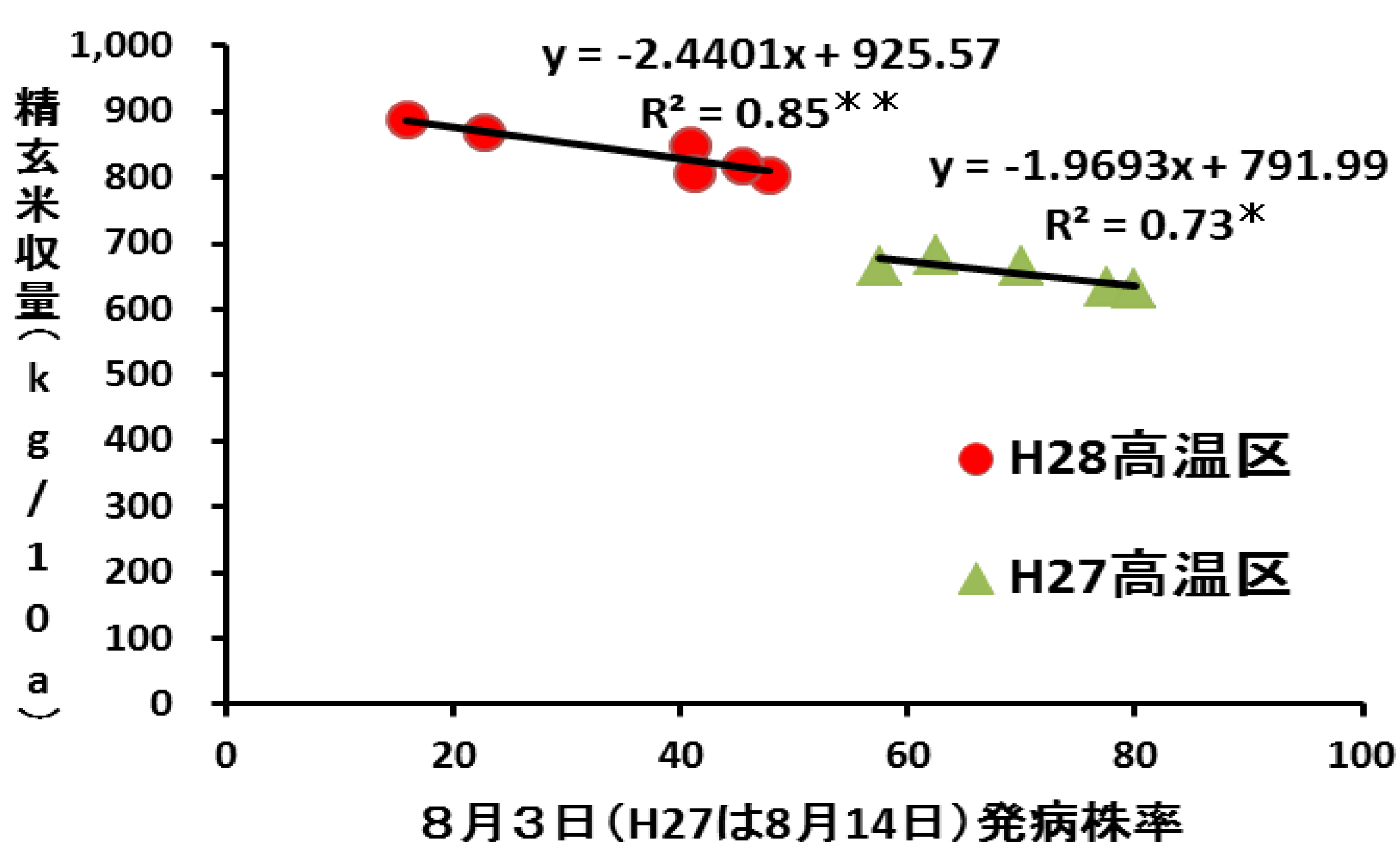
BLIGHTASによる宮城県Y町の発病予測と実測値

多発ほ場は前年の収穫期発病株率が40%以上のもの

普通ほ場は多発ほ場以外のもの

前年の発病株率を40%以上(多発ほ場)とそれ以下(普通ほ場)に分けることで、周辺地区の発病予測はほぼ当てはまることが分かりました。

2 温暖化条件下では8月上旬の発病株率に収量が影響を受けるため、7月末の防除が効果的であることが分かりました。



温暖化条件下では玄米収量は8月上旬の発病株率に影響を受けているので

7月下旬の防除で8月上旬の発病株率は抑えられる